

育てたい生徒像を明確にすることが、 「あたり前」を見直す鍵に

変化の激しい時代に対応し、よりよい教育活動の実現が求められる中、
学校において、これまでの「あたり前」を見直すためには、
どのような視点が必要となるのか。

『子どもの可能性を狭めているかも？先生のための「つい…」の
決めつけをほぐす練習』(明治図書出版)の著者で、
公立小中一貫校の管理職を務める茂木正浩先生に、
VIEW next 編集部統括責任者の柏木崇が聞いた。

VIEW next 編集部
統括責任者

柏木 崇

東京都公立小中一貫校管理職
一般社団法人アンコンシャスバイアス
研究所認定トレーナー
星槎大学大学院客員研究員

茂木正浩

人が陥りやすい「決めつけ」や「思い込み」に気づくために
「あたり前」を見直す鍵に
柏木 先生はご著書の中で、人が陥りやすい「決めつけ」や「思い込み」に気づき、人や物事に対する見方を変えたためのヒントを紹介しています。先生自身は、どのような経験や考え方を通じて、固定観念にとらわれない柔軟な見方を培ってきたのでしょうか。

茂木 私は長年、社会科の授業研究に力を入れていて、プライベートの時間も削って仕事に打ち込んでいました。40代になると自分の世界を広げたいと思いつつ、民間が主催する教員研修に参加しました。そこで知り合った教師や講師と連絡を取るためにSNSを使い始めたところ、全国の先生方の様々な活動を知り、視野が広がりました。自分を高めようと読書の分野を変えたり、他業種の人と出会える場に参加したりする中で、今までとは違う情報に触れるようになり、自分の働き方や学校での活動に疑問を持つようになりました。

柏木 多様な人たちとの交流を通じて、ものの見方や考え方があわつていったのですね。

茂木 その後、決めつけや思い込みをなくすための見方・考え方を学ぶセミナーに参加しました。そのセミナーで

は、日常生活で自分が無意識に決めていることを探すワークなどを経験しました。セミナー後も、ほかの見方がないかを考え、1つの情報に縛られないことを意識するようになります。例えば、廊下を走っている子どもを見かけると、以前はきつい口調で「走っては駄目！」と一方的に注意していましたが、今は子どもに、「なぜ、走っていたの？」と聞くようになります。何か急ぐ理由があったのかもしれませんと考るようになったからです。

柏木 先生ご自身が「決めつけない」という姿勢を持って以降、学校においてどのような「あたり前」を見直してきたのでしょうか。

茂木 勤務校では毎年、マラソン大会を実施しています。以前から近隣の公園のマラソンコースを使っていましたが、コースが狭いため、子どものみの参加でした。頑張って走る子どもの姿を大勢の人に見てもうえないと考え、体育主任と検討し、昨年度、ゴールを校庭に変更しました。マラソン大会は体力の向上に加えて、忍耐力や粘り強さの育成といった目的もあります。子どもがそれらの力を発揮するためには、保護者や仲間の応援が重要になると考え、コースを見直し、大勢が集まることができる校庭をゴールにしました。



茂木正浩（もぎ・まさひろ）大学卒業後、民間企業に3年間勤務。通信制大学で小学校教諭免許を取得して小学校教員となり、学年主任や各分掌の主任を担当。自費で大学院に進学し、教育学修士号を取得。一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所認定トレーナー、一般財団法人日本ペプトーカ普及協会認定講師なども務め、オモロー授業発表会関東の運営などにも携わる。著書に『子どもの可能性を狭めているかも？先生のための「つい…」の決めつけをほぐす練習』（明治図書出版）。

「あたり前」の見直しを難しくさせている学校特有の環境
慣習化している業務や活動を変えるのはなかなか難しいといった話も先生方から聞きます。なぜ、「あたり前」を見直すことは難しいのでしょうか。
茂木 理由の1つとして考えられるのが、学校特有の環境です。まず、年間の活動計画が毎年ほぼ同じという点です。一方で、活動の目的を考えなくとも実施できるようになると、実施すること自体が目的となってしまいがちです。

また、学校は基本的に、年齢や発達段階の近い子どもが集まる場です。そこで、活動の見通しが持てる、ノウハウが蓄積されるといった利点はあります。一方で、活動の目的を考えなくとも実施できるようになると、実施すること自体が目的となってしまいがちです。
茂木 学校は生徒の未来のためにある場所だからです。未来の社会を生きる生徒にどのような資質・能力を育むのか、そのために、どういった教育活動

が、学校特有の環境です。まず、年間の活動計画が毎年ほぼ同じという点です。一方で、活動の目的を考えなくとも実施できるようになると、実施すること自体が目的となってしまいがちです。
柏木 「あたり前」の見直しが難しい環境にあっても、なぜ今、学校は「あたり前」を見直す必要があるのでしょうか。
柏木 「あたり前」の見直しを難しくさせていていると考えられます。

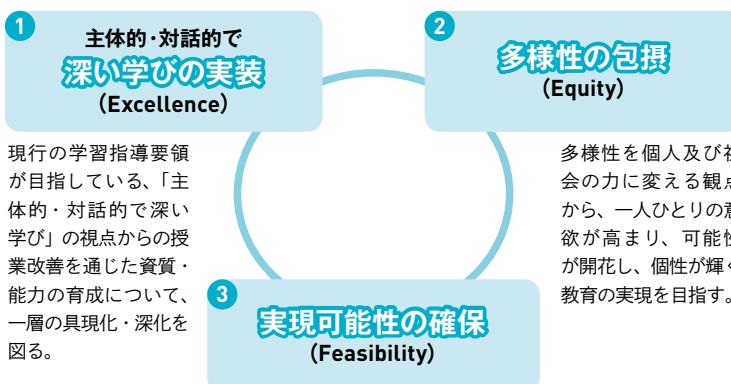
教育動向と照らし合わせて言えば、中央教育審議会の教育課程企画特別部会では現在、学習指導要領の次期改訂では、子どもを個別的に捉えず、一人ひとりの個性が輝く教育を実現するため、教育課程の編成において学校の裁量が拡大する見込みです。学校が自校の生徒にとって最適な教育課程を編成するためには、既存の枠にとらわれずに教育活動を考えること、すなわち「あたり前」を見直す視点が重要になると考えます。

柏木 次期改訂の議論では、現行の学習指導要領が実現を目指している、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通じた資質・能力について、一層の具現化・深化を図ることも方向性の1つに挙げられています。その「主体的・対話的で深い学び」の実装も、柔軟な教育課程の

が必要なのかを第一に考えるべきであり、漫然と前例を踏襲することや根拠のない決めつけは、よりよい教育活動を妨げる大きな要因になります。

教育活動の改善を持続可能なものにしていくためにも、茂木先生がかつて「今の働き方でよいのだろうか」と疑問を抱いたように、教師一人ひとりが「あたり前」を見直すことができるようになることが大切なのだと、先生のお話を聞いて改めて思いました。

図1 学習指導要領の次期改訂の議論を貫く3つの方向性



デジタル学習基盤のさらなる充実、教科書や教材、指導書の改善、必要な設備の整備、総合的な勤務環境整備とも相まって審議全体に通底させるべき方向性。

※中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」(2025年9月)を基に編集部で作成。

図2 子どものより主体的に社会参画にかかる教育に関する課題

① 教育内容面の課題

- 選挙権年齢の引き下げに伴い、高校教育において特に大きな改善を図ったが、さらなる取り組みの余地がある。また、中学校において校則見直しなどの取り組みが進む一方、子どものかかわりが十分でない例が見られるほか、小学校においても、学校運営上の様々な場面において、子どもの主体的な参画の余地が大きい
- 小・中・高を通じて、GIGAスクール構想で整備されたクラウド環境を生かして、意見を可視化したり、少数意見を吟味したりして、よりよい合意を実現する取り組みが進みつつあるが、道半ば
- 我が国の学校教育の長所であるはずの協調性の涵養が、ともすれば集団性的強調に陥り、子どもにとって意義が不明確な校則や学級ルールなどの存在とも相まって、「同調圧力」への偏りを生んでいる側面も指摘されている。また、意見表明の機会の確保や対話や協働を通じた参画の機会は、多様性を包摂する教育の実現にとっても重要であるが、十分に整備されているとは言えない

② 学校・社会の受け皿などの課題

- 子どもの意見を授業や教育課程に生かす仕組みや、その際の指導技術などが未成熟という課題もある
- 子どもを社会の一員として受け止め、その意見を政策や社会の仕組みづくりに生かす地域・社会の受け皿が不足している

- 総じて、子どもたちにとって身近な社会である学級・学校をフィールドにして、意見表明の機会、合意形成の機会、参画の機会をより充実させる余地があるものと考えられる。そのために、学習指導要領において関連する教育内容を適切に盛り込むとともに、教員研修も含め、必要な条件整備を図る必要がある

※中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」(2025年9月)を基に編集部で作成。

生徒の「あたり前」を見直す力を育むために教師がすべきこと

次期改訂の論点整理では、「子どものより主体的な社会参画にかかる教育の改善」(図2)が挙げられ、言わば生徒も「あたり前」を見直す力が必要だと示されているように思えます。そうした力を生徒が身につけるためには、教師には何が求められるのでしょうか。

茂木

教師から一方的に与えられるだけでは、「あたり前」を見直す意識や社会参画の意識は生徒に芽生えないと思います。私は「生徒が持つ力はこれだ」とは決めつけずに、何事も

任せることで大切だと考えています。任せると言つても、「放任する」わけではありません。活動の目的や進め方について教師と生徒が対話し、合意形成を図ることが不可欠です。その過程

ここまでだと、何事も任せることで大切だと考へています。

任せると、何事も任せることで大切だと考へています。

が育つ機会になります。教師の役割は、そうした場面で生徒に寄り添い、対話を通じて再度挑戦を促すような支援をすることではないでしょうか。

茂木 知人の校長は、「この学校をつくっていくのは君たちだよ」と繰り返し子どもに伝えていたそうです。子どもが「自分たちが学校をつくるんだ」と強い意識を持てば、「自分たちの学校の何が課題か」と、自ら考え始めるはずです。

目的や成果、効率性の視点を持つことで「あたり前」を見直す

柏木 ここまで話でもいくつか出てきましたが、どのような視点を持つといれば、見直すべき「あたり前」に気づけるようになるでしょうか。

茂木 取り組みや活動、仕組み・制度が、①目的に合っているか、②目的に応じた成果を出しているか、③効率的に進められているか、④時代の要請を踏まえているか、⑤生徒が主語であるかといった視点を持つことができないと、見直すべき「あたり前」に気づきやすくなると思います(図3)。それら

の視点で授業や学校行事、分掌業務などを見ると、改善すべき点を見いだすことができるのではないか。

柏木 本誌の読者モニターアンケートで、教師自身や学校が見直した「あたり前」について尋ねたところ、様々な回答が寄せられました(図4)。例えば、「遅くまで職員室に残つて仕事をする」とが『よし』とされる風潮を見直すことができた要因は何だと思いますか。

柏木 次の日もしっかりと生徒に向き合つために、段取りや時間配分などを考えて効率的に仕事を進め、自分や家族との時間も大切にするという意識の転換を多くの教師ができたからではないでしょうか。

柏木 目的や時代の要請を考えた視野の広い働き方が大切なですね。資料のペーパーレス化なども、進んでいる学校とそうでない学校があるようですね。

茂木 資料の用途を踏まえて、紙かデジタルかの使い分けが重要だと思います。一覧で見たい、壁に貼つておきたいたなど、使い方によつては紙の方がよい場合もあります。どちらがより効率的かを考えるとよいと思います。

柏木 服装や校則に関する見直しにおいて留意すべき点は何でしょうか。

茂木 生徒の意見を聞くことが何よりも重要です。まさに生徒が主語の教育

どうすれば見直せる？学校の「あたり前」

図4 本誌読者モニターから寄せられた、見直した「あたり前」の例

- ・遅くまで職員室に残り、仕事をやっている感を出すことをやめた。(公立)
- ・通知表や生徒指導要録の手書きをやめ、デジタル化。授業の課題や資料なども、紙ではなくデジタルで配信。(私立)
- ・テストの採点にICTを活用した。業務の効率化が図られ、結果分析に時間を割くことができるようになった。(公立)
- ・朝の全体の打ち合わせを廃止した。(公立)
- ・職員室を固定席とせず、フリーデスク化した。(公立)
- ・教師による現金徴収をやめ、銀行振り込みを導入した。(公立)
- ・「総合的な探究の時間」の授業時間を45分間にし、夏季休業の短縮などをして、金曜日の午後を「金探」と称して探究学習の時間にした。学校外の活動も奨励。(公立)
- ・生徒自身が写真を撮影することができる時代であることを踏まえて、卒業アルバムのページ数を調整した。(公立)
- ・部活動の目標を、顧問ではなく、生徒が設定し、その達成に向けた計画も生徒が立てるようにした。(公立)
- ・学校のルールは社会のルールと同一と定め、学校独自の校則を撤廃した。(公立)
- ・頭髪、身だしなみの厳しい指導をやめた。(公立)
- ・夏服・冬服の衣替えを廃止。好きな時に夏服・冬服を選べるようにした。(公立)
- ・生徒会の取り組みにより、冬季の部活動終了後のウンドブレーカーやジャージでの下校を認めることとした。(私立)

*『VIEW next』高校版読者モニターアンケート結果より（アンケートは2025年10月にウェブで実施。有効回答数は115）。

図3 見直すべき「あたり前」に気づくための視点

視点1 ●目的に合っているか

- 目的を達成できる取り組みや仕組みか。
- 実施することが目的になってしまっていないか。

視点2 ●目的に応じた成果を出しているか

- 目的を達成する成果が出ているか。
- 費やした時間や労力に見合う成果が得られているか。
- 取り組みが自己満足に終わっていないか。

視点3 ●効率的に進められているか

- 慣習として続けている非効率な手順はないか。
- 省略できるステップはないか。
- ICTを活用することで、自動化・代替できる部分はないか。

視点4 ●時代の要請を踏まえているか

- 社会や技術の変化によって、取り組みや仕組み自体が「時代遅れ」になっていないか。
- オンライン化やAIの活用などを取り入れることで、取り組みや仕組みの質の向上、新たな価値の創出ができるないか。

視点5 ●生徒が主語であるか

- 生徒のニーズや実態に合っているか。
- 生徒にとって、その活動にどれだけの学習的・精神的な価値があるか。
- 学校の都合のみに依拠した活動になっていないか。

*取材を基に編集部で作成。

を行う機会となります。

柏木

①目的に合っているか、②目的に応じた成果を出しているかを検証するには、振り返りが重要になりますが、

本誌の読者モニターアンケートには、「あたり前」を見直すことができない要因として「振り返りの機会が少ない」といった声も多く寄せられました。

茂木

振り返りが不十分なのは、忙しさに加え、効果検証のノウハウ不足も

考えられます。例えば、学校満足度調査を実施しても、その結果を具体的な改善につなげられるほどの分析ができていませんが、その分析ができないケースは少なくないと想います。

管理職こそ、未来の社会に目を向ける

柏木

「あたり前」を見直すことがで

きる教師集団を形成するために、管理職には何が求められるでしょうか。

茂木 教師のウェルビーイングを本人だけの問題として捉えるのではなく、組織全体で高めていくことが重要で

次ページからは、4校の実践を紹介する。業務負担の軽減や持続可能な探究学習、教師の勤務形態、部活動の実施形態、校則の見直しといった課題を前に、各校はそれまでの「あたり前」をどのように見直していくのか、その過程を見ていく。



す。心に余裕がなければ改善につながるような振り返りはできませんし、生徒が主語の教育をしようという意欲も湧いてきません。多忙感の解消のため、教師一人ひとりの適性や専門性、業務負担などを見極め、できる限り不公平感がないように仕事を割りあてることが、管理職の大切な仕事です。

柏木

今後は未来の社会に目を向けること

が、管理職には一層求められるようになるでしょう。教育の不易を守りつつも、社会の変化に対応した教育を行っていくことが重要ですが、そつした教育を「やってみよう」と前向きに納得できる言葉で現場の教師に伝えるためには、管理職自身が未来の社会を見据えている必要があるからです。

そして管理職に限らず、教師は「こ

ういう生徒を育てたい」という思いを持ち、同僚と語り合うことが何よりも大切になります。それは不斷に、そしてなやかに「あたり前」を見直して、よりよい教育を実現するためにも必要なことではないでしょうか。